小さな芽に、水と風と光と……火を。

把　多摩子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
小さな芽に、水と風と光と……火を。

【Ｎコード】
Ｎ１６８５Ｕ

【作者名】
把　多摩子

【あらすじ】
小さな、芽。
愛しいと思う、火・水・風・光。
別作品、ＤＥＳＴＩＮＹシリーズの発端です。

※他サイトからの転載です。

乾いた大地から、一つの小さな芽が生まれました
まだまだ小さいけれど頑張って大きくなろうと一生懸命
その芽を輝かせる為に、応援する為に、みんなが力を貸しました

水は優しく芽を撫でるように降り注ぎ、潤いを与えました
その水のおかげで芽は元気に育ちました
水を頼って、不安な時は水を呼びました
水はいつでも近くに居ました

風は爽やかに芽の近くを通り抜けます
時折芽が揺れて、風と一緒に踊りました
風を頼って、落ち込んだ時は風と遊びました
風はいつでも近くに居ました

光は多少遠慮がちに、遠くから芽に光を与えました
その光のおかげで芽は素直に伸びていきました
光を頼って、困ったときは光を身に一身に浴びました
光はたまに雲に隠れましたが、遠くからでも見守っていました

火は芽を暖めようと努力しました
暖かい火のおかげで、芽は明るく大きくなりました
火を頼って、寂しいときはいつもいつも呼びました
火は、自分のその熱い身体で芽を燃やさないように一定の距離を保っていました

けれども火は、水と風と光が羨ましくなりました
自分は芽に触れられないのに

水は優しく芽を撫でて、風は包むように流れて、光は粒子を芽に降り注ぐのに
火は空気を暖めるだけ、間接的にしか芽に近寄れません
それが嫌で嫌で、火は芽に触れたくて触れたくて
遠くから水と風と光が、芽を慈しむのを眺めて
やがて火はそれが耐えられなくて、嫉妬の業火となりました

水を蒸発させ、風を押さえ込み、光を遮って、芽に近づきました
「嫌なんだ、嫌なんだ、耐えられないんだ。僕の傍に居てよ。僕だけにしてよ。苦しいんだ」
火は、水と風と光が止めるのも無視して、芽に触れて、そのまま抱きしめました
全てのものから芽を覆い隠す形で、火は芽を包み込みました
この瞬間、芽は火のものになりました
満足して火が我に返ると、芽は、自分の火で焼け落ちて、消えていました
後には微かに黒い燃えカスが残っていました

芽を大事に守り抜きたいと思っていた火は、いつしか願いが変わって
芽を誰の目にも触れさせないように、自分のものにしたいと願った時に
火の中で何かがコトン、音を立てて外れていました

芽が消えて、自分のものになったのだと満足したのも束の間
消えたということは、二度と芽を見られないということで
芽は大きくならないということで
芽を暖めたときに嬉しそうに笑う姿が好きだったはずなのに
……火はようやく過ちに気がつきました

けれども、芽はもう戻ってきません

火は知りませんでした
芽が、火をずっとずっと見ていたことに
火が一番安心できて好きだったことに
ずっと、火に触れて欲しいと思っていたことに
水と風と光はそれを知っていたけれど
当の火だけが知りませんでした
けれども、芽はもう、戻りません

もしかしたら、芽はこの最期が満足だったのかもしれません
しかし、誰も望まなかったことでした

大地は再び、乾いた大地に戻りました

＞ｉ２６０８２—３３９７＜

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1685u/

小さな芽に、水と風と光と……火を。

2011年10月9日06時16分発行